

宮城のニュース

被災外国人がラジオ番組 母国語で語り生活支援 気仙沼



ラジオ番組の録音を試すフィリピン出身者たち

気仙沼市で外国出身の被災者たちが、ラジオ番組の制作に取り組んでいる。母国の言葉で支援情報を伝えながら、コミュニティーづくりを進める試み。支援グループは「ラジオを使い、地域で孤立しかねない外国出身者を助けたい」と話す。

気仙沼市本吉町の伊藤チャリートさん(37)=フィリピン出身=方に6月下旬、ラジオ番組の録音機材が設置された。「こちらは気仙沼のフィリピン人コミュニティーです」。伊藤さんらはタガログ語であいさつする練習をした。

避難生活の苦労やフィリピンのヒット歌謡、行政情報を紹介する1時間番組を作る計画。伊藤さん方で録音し、気仙沼や各地のFM局で定期的に放送してもらう。

伊藤さんは、気仙沼や南三陸地区のフィリピン出身者の互助会「バヤニハン(助け合い)国際友の会」の副代表。「震災体験をタガログ語で話し、フィリピン出身者にいろいろアドバイスしたい」と意気込む。

番組作りやラジオ機材の提供は、翻訳や通訳を行うNPO法人「多言語センターファシル」(神戸市)が協力した。

ファシルは1995年の阪神大震災後、外国人支援のため活動を始めた。理事長の吉富志津代大阪大特任准教授は「ラジオは情報交換やコミュニティーづくりの重要な道具」と説明する。

吉富さんが役員を務める神戸市のFM局「エフエムわいわい」は、日本語を含め10カ国語の番組を放送。伊藤さんたちの番組も流す予定という。インターネットを通じ世界にも発信する。吉富さんは「日本人が国内の外国出身者を理解するのにも役立つ」と話す。

2011年07月09日土曜日

Copyright © The Kahoku Shimpo